

踏査記

屋形島

湘南史談会会長  
佐伯史談会委員  
富沢泰

蒲江は漁業の町、町の中心蒲江浦は県内屈指の沿岸漁業の基地、広い岸壁には大小無数の漁船が舷を並べてひしめきあい、水揚げされた魚は市場でせり声かまひすしく、道路沿いの浜には加工作業の女の群が忙しく立働いている。あたりにはただよう魚臭は、馴れない人にとっては一層異様なものであるが、そこにあるものすべては生産のリズムミカルな躍動であり、人間の汗を交えての所の体臭でもある。

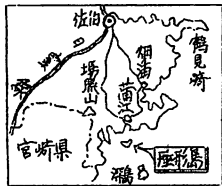
その港を後に小さなポンポン船で海上二・五き、屋形島は二十分足らずの航程である。

真珠殻、ハマキ養殖の生けすなど張りまわされた湾内は波静かに、湾外右左に突出した岬や岩礁によって囲まれ、天然の養殖場といえよう。

浜水綿

島の北の阜の船着き場は、小さな岩礁をコンクリートで連ねて、簡潔な突堤となっていて、氣樂に上陸出来る。

砂浜には波打ち際近くから浜水綿（ハマキ）の花が白く咲き、浜風にそよいで私たちが一行を迎えてくれる。砂丘の上には海水浴客のための日除け小屋が、蒲



江観光の手によって設けられていて、シャワーの設備、鉄骨造りの休憩所売店もあって、七八十人は楽に収容出来ると思われるが、暑中休暇直前の平日だけに、この日は番入も客の姿も見えない。

この休憩所を基点として、砂浜は島の西端「洲の鼻」まで約四百メートル伸び、その先にはコンクリート・ブロッグによる消波堤が長々とつづいていて、遠浅の海、汚れを知らぬ海は澄んでおだやかに、砂丘は中広く、浜水綿の群落は真夏の暑熱と、強い日光に照らされ、その葉は青々と太く、熱帯植物らしいたくましさで繁茂している。真盛りの花はふくいくと香りを放って、常夏の情感をいっぱいたたえていている。この浜水綿の群落、その株数はいかほどであるうか、五千、否七千か、更にその根元には昨年の実が自生して、無数の芽をふいていく。

今日の一行は、蒲江町の文化財調査委員と所教委の職員、それに佐伯史談会の羽柴弘氏。そして特にこの浜水綿観察のために、蒲江高校の「浜水綿先生」とこと態谷教諭にご同行、ご案内を願った次第である。

蒲江の浦々の海岸は、変化に富んでいて美しい。その海岸の集落数は二十部落を越え、その内七、八か所に美しい砂浜があり、昔から浜水綿の群落が自生していた。浦の人々は「浜おもと」とよんで、強いて賞するでもなく、そこにあるのが当り前のように昔から過ごしてきた。その浜水綿が、海岸保全の防波堤をめぐらすためや、心な砂採取のために失われ、浦の人達が関心をもちた時には、その場所を思い切り荒らされてきた。

蒲江は出稼ぎの町でもある。母校蒲江高校を卒業して、都会のビルと車の交錯するジャングルで暮らす人は多い。蒼く澄んだ海、その砂浜に繁り咲く浜水綿は、蒲江の象徴ともいえよう。大分県下第一の浜水綿の群落は、

望郷の一つの夢でもあろう。「浜水綿先生」は郷土の美化と、他郷に暮らす人々のための郷愁に念えようとして、往古の浜水綿群落の再現、さらに拡大のために、堅い発意をした。

それから数年、蒲江高枝の生徒の中の有志は、先生と一丸となってこの運動を展開し、そして将来に向けての行動をとりつづけている。それは地についた尊い教育の場ともなった。

私たちが今見る屋形島のこの浜水綿は、その先生たちの意願が現実となって、かくも壮大な花園といつてもよい、花の大群落となったのである。

今生徒達の手によって、下入津地区の元嶽・高山の海水浴場の砂丘にも、延々ニ咲やくわたり、浜水綿の苗が植え込まれているという。ここ数年をたぬうちに、屋形島のこの群落に数倍する浜水綿の海岸ができ、町の人達はいうまでもなく、海水浴客や海を愛して訪れる人達に、南国の情緒を満喫させてくれるにちがいないと信じている。



この外浜水綿は、上入津地区の大懸津海岸・江武戸岬、下入津地区の洲崎・洲の本、名護屋地区の葛原・波当津の海岸と、今も自生しているし、さらに拡大の地域も広い。ヒガンバナ科のこの花は、アフリカが原産地というが、遠く印度洋・太平洋の黒潮によって、ぼるかに遠い昔、温暖な日本列島の海岸に漂着し、磯波にうちあげられて芽をふいたものであろう。清らかな海がそこにあつたから、青い山がかなたに続いていったから、珍らしくもなく尊く、よいこの花だったのが、天恵のこの熱帯植物浜水綿への関心がもたられ、県下

に誇るものとして保護せられ、所花として指定される時、浜水綿先生と蒲江高枝の生徒諸君の人間形成にも何かが残る、その夢が実現し努力が酬いられるのは、そう遠い日ではあるまい。

ここで地足ながら少し書き加えたい。万葉の歌人柿本人麻呂が紀州熊野灘の海岸の浜水綿の群落に驚き残した一首がある。

又熊野の浦の浜水綿百重ひやくえいなす  
妹は思へど直ただに逢あはぬなかも

和歌山県ではこの浜水綿について、県で保護条例を定めておるときが、この人麻呂の歌を通じて、古い千幾百年の歴史が感じられる。

### サンゴ礁

屋形島のサンゴ礁については、今更私がかこに書くまでもなく、県内外にひろく紹介されつくしているが、今日に至るまでの研究おるいはPRR日、町当局のこれに注いだ努力、それは並大抵ではない。

今回の日豊海岸国定公園の指定の、佐賀関から日向美津までの海岸線の中でも、この島のサンゴ礁はきわめて特色があり、注目されている。そこで何年も前から、蒲江観光のグラスボートによって、観光客の目を惹きつけておいていたが、近ごろ目立って観光客の姿が多くなつたようである。

岬と小島に囲まれた波静かな蒲江の湾内、グラスボートは十分足らずで屋形島の西海岸である。ボートの船



底からのぞくと、三四層にその海底の岩礁に群生した、巨大なテールサンゴをはじめ、イボサンゴ・キリメイシなど、その種類も多く、当地として貴重な観光資源だといわれている。その大小無数のサンゴ礁の、多様な色彩の間と、色とりどりの熱帯魚の群遊と、波の力らや海藻の姿は、自然の天女舞踏と、天女の舞踏と思わせるすばらしい景観である。

しかしこの屋形島のサンゴ礁で、観光に利用されているのはほんのごく一部であって、島の周囲いたるところの海中には多種多様のサンゴ礁があり、ここから見るか南方十二才の沖にある深島の周辺にも、さらに多数のサンゴ礁の群生地があるという。

砂丘の上の洪水綿、海底のサンゴ礁、加えて遠浅の静かな海をまっ屋形島は、絶好の海水浴場であるが、このことはもっともっと宣伝する必要がある。

西の洲の鼻には、消波堤のテトラポットがさらに四百餘ほど突出しているが、その外側の砂浜は波によって強い浸食が進んでいる。所当局はこれの防護には奮心しているという。放っておいたら砂浜はどんどんなくなり、はては洪水綿の群落までおびやかされる。

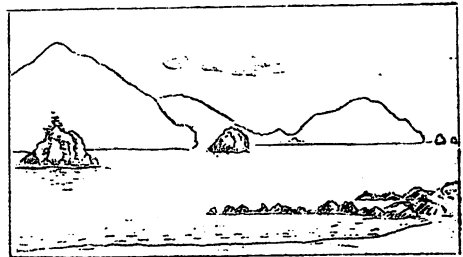
この浜に立って西を望むと、海上二歩ほどを隔てて名護屋岬が延々四ま南に向かって伸び、そのけわしい山並みのどこかに、悲運の城主佐伯惟治公が、四回逃避を圖ったという伝承の遺跡が残っているであろう。

さらに眼をさるか南に移せば、景壇宇戸崎が見え、晴れた日にはその突端に波浪の浸食作用によってつくられた大洞門が指顧される。

視線を上げて北西の空を仰ぐと、丸市尾の背をなす山並に一きわ高く、町内随一の高峯馬殿山である。標高六

百六十餘、ここを源とする谷水が有名な「産内溪谷」であり、大小三十余の滝となっている。

このように屋形島は、周囲わずか五五に足りない小島であるが、ここから見る内陸部の景観もすばらしい。また北側、部落のある海岸から東北方、湾口の粒島などの岩礁を近くには、音平山、元嶺山、三ツ子島、そしてはるか遠くは芹崎山と望む海上の景観は豪壯である。



屋形島の太平洋側（東岸、南岸）は絶壁で人を寄せつけぬが、内海に面した北側と西側には砂浜があるが、道路はほとんど未開発といつてよい。洪水綿のある西の砂浜から、民家のある島でたった一つの部落までは、船便によるの外はない。

波止場で船をおり、小さなトンネルですぐ部落に通じる。砂浜の暑さとはうらはらに、このトンネルの涼しさは格別である。ここで網つくりをしてきた古老に、一行のうち西元氏が部落内の案内を頼む。

島の周囲約五時、面積一、二平方キロ、戸数二十四戸、人口と過疎の状態で、半農半漁で暮らしているが、その農業は甘藷と表を主作にしていたが、段々島は今は殆んど荒れはてている。漁業は対岸の蒲江漁港に主力がおかれているだけに、部落を歩いては漁村らしい風情はさわめてうすい。

この島の調査については、佐伯藩や島に残っている古文書によって、次のように伝えられている。

(一) 元禄七八年(一六九四五年)佐伯藩五代毛利高久

屋形島の開墾がはじめられた。

(二) 享保九年(一七二六年)六代毛利高慶

藩政の、馬の放牧場となり、馬十頭を放つ。以

二十六年間経営され、寛延二年(一七四九年)廢止

された。

(三) 寛保三年(一七四三年)赤木村の豊民十五戸を深島に

移すことになり、そのため享保六年(一七三二年)

から深島に入植していた四戸を屋形島に迎えて

いる。

これらのことについては、昭和四十四年別府大学の歴史学研究所のグループによって調査され、島の歴史や民俗が記録されている。

古来の案内で島の産土神蔵島神社に参拝する。途中の村道は、狭いけれど、土まきと舗装されている。民家の軒下は納屋で、玉葱や馬鈴薯、南瓜などの野菜類が豊富に蓄わえられ、漁村というよりむしろ堅い農村のような印象をうける。前時代、狭い耕地で、出来のだけ自給自足の生活に一生懸命だったであろうその勤労の姿を、膚で感じられるものがある。農産物貯蔵の白壁の土蔵が幾棟も残っており、歴先に屋敷神が祀られているのも珍らしい。

部落の一番奥、こんもりと茂った神社の前庭で、西元氏持参の古文書等へ前記別府大学調査資料と中心に、古老の話を交えての話を及ぼす。佐伯藩放牧の馬が山中に長々と堀が作られ、その痕跡が今も残っている。その下に、本浦から多くの入夫が働いたことである。それらの記録は今もところまた見つかっていない。

町教委の前田、富高両君は、町史編さん資料に、その牧場を写真にとりたいと望んだが、荒れ藪だった小道を上ってでは、とて今日の間はあわない。

島は離島振興法に随分と前から指定され、電気・水道

また電話まで整っているが、たまたま浦江所にゆかけるには、各自の船も便船を利用する外ない不便さが残っている。

再び浜に引き返す。経にのびるきれいな干しいかが、浜風にゆれている。沖合には望まれる岩礁の一つ、粒島が造形の石炭のように波に浮かんでいる。牧場は写し得なかつたが、この風景は何枚かカメラにおさめた。

この島には浦江小学校の分教場がある。三人しかいない児童にとつては、広い校舎である。熊谷教諭も浦江小学校在職中、この島の担当者としてよくこころをこめていた

そうである。

屋形島は、昔は中島と呼ばれていたという。それは沖合の深島と浦江浦の間に位置しているのだから、佐伯の殿様が洲の鼻で屋形船に乗って遊んだからだと島の人曰

語ったそうである。(別府大学民俗調査資料による)

また、館島と文字を定めているものもあるが、名付けられ「屋形島の文字」とでも題して二三紹介したい。

泛舟館島 松下筑陰

絶島波心聳 振衣浪渤中

鯨魚捧明月 鵬翼揮長風

潮起天門碧 珠生海岸紅

蓬瀛如可覓 忘自此間通

鳥は絶えて波心聳え、衣を振う深潮(大海)の中、鯨魚(すげ)が明月を捧げ、鵬翼長風を揚ぐ。潮は天門の碧き起り、珠は海岸の紅に生ず。蓬瀛(ほうよう)は神仙の山、巖おびきが如く、海に自ら此の巖に通ずべし。

この五言律、題して「舟ヲ館島(屋形島)ニ泛グ」となっているが、作者の松下筑陰は筑後久留米の生まれ、日田に家塾を潤いて玄瀬渡窓の幼学の師であった。招かれ佐伯に来て藩主毛利高操の寵遇を得、藩学四教堂の教諭の基礎を据えた人である。

この詩の第六句に「珠ハ海岸ノ紅ニ生ズ」とあるが、一体これは何を指しているのである。漁師のもつ海鏡(四角な指目鏡)によって、今のサンゴ礁の色彩を、当時の文人達も觀賞していたのではあるまいか。

さらに、有名な「蒲江八景」の中にあげられている、屋形島を詠んだ漢詩と和歌を掲げてみよう。

館島

古川 龜

秋潮何渺々 蘆荻月蒼々

半夜雁声集 長天月似霜

秋潮何ぞ渺々たる、苦秋月に蒼々たり。半夜の雁声集まり、長天の月似霜に似たり。

(この作者古川龜は佐伯藩士、外不明)

橋迫春菰

秋毎に落ちくる雁は屋形島

名をたのみにて宿るなるらん

(橋迫春菰は土所明神社の祠官、慶応三年歿六十二才、可学者)

次に、現存の方の屋形島の短歌と、俳句とお目につけよう。大内女史は佐伯市葛原にお住居なさる、郷土の代表歌人、その著作歌集「花かた」から二首。俳句はこの日同行した羽柴氏の即興吟である。

大内須藤子

海底のグラスを透きいきはやかに珊瑚礁

見えコバルトスズメ泳ぐ

わが父祖の馬も育ちし屋形島渚に白き菖き  
貝拾ふ  
龍 川

洪水綿の群落ことごとく花咲きて  
十のゆすす洪水粒島中はるか

屋形島は、日豊海岸国定公園中の観光のメッカとなるであらう。広い地域にわたる洪水綿の群落、島に連なる岩礁や小島など、それらは開發されるに違いない。この天然の自然美が、都市的に觀光化されてるとき、美しい自然を破壊しないように、よくよく心して貫わなくてはならない。屋形島は蒲江町を後にして、他郷で働いている数多くの人々の、母のような魂のふるさとでもある。屋形島を後に、蒲江に帰る船の中から、次第に遠ざかる島をなつかしむ、島の人達の生活の幸を祈った。一行は船の上で、なお屋形島の洪水綿とたたえながら、賑やかに語り合う時とまへることが出来た。(おわり)

初 秋 羽 柴 龍 川

行く道のまだ陽の暑き御所が谷  
石積みの奇しくも巨き、神籠石

法螺貝を吹く人影はなし英考の山  
阿蘇久住望めど遠し 秋がすみ

御許山巨杉のほとの花若荷  
道のべに白木萱咲く三軒屋